

大雪山の火山活動解説資料（令和5年7月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①~③、図3~7）

監視カメラによる観測では、旭岳地獄谷爆裂火口の噴気の高さは火口上100m以下で経過しており、噴気活動は低調な状態です。

27日から28日にかけて現地調査を実施しました。旭岳地獄谷爆裂火口では、前回の観測（2022年8月）と比べて噴気活動の状況に大きな変化はみられず、多くの噴気孔で噴気温度が100℃以上（I-8は200℃以上）の高温な状態が継続していました。

・地震及び微動の発生状況（図2-④）

火山性地震は少なく、地震活動は低調な状態です。

火山性微動は観測されていません。



図1 大雪山 西側から見た旭岳の状況（旭岳姿見2監視カメラによる）

この火山活動解説資料は気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和5年8月分）は令和5年9月8日に発表する予定です。

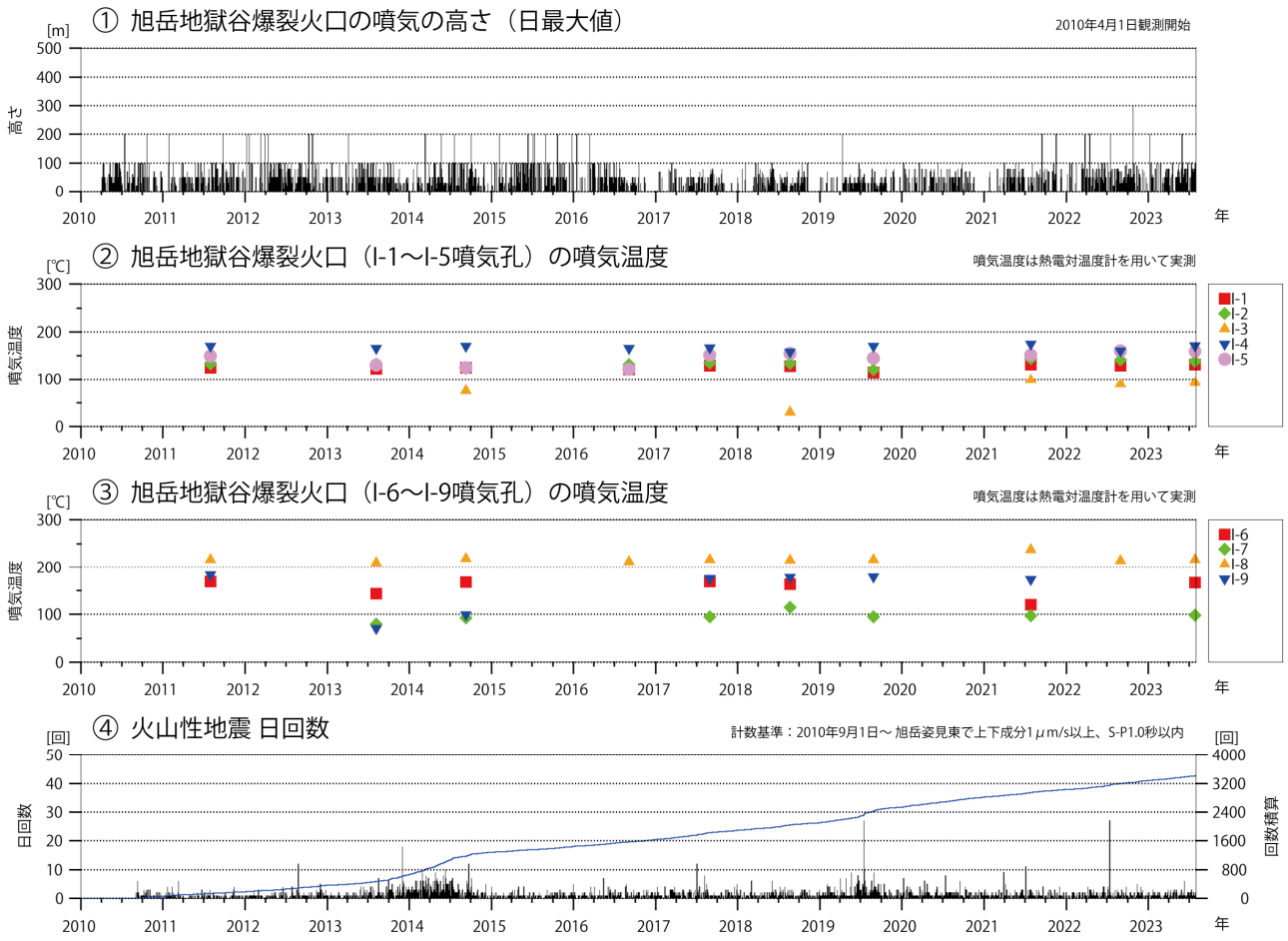


図2 大雪山 火山活動経過図（2010年4月～2023年7月）

②③の噴気温度の測定位置は、図3（噴気孔の位置図）を参照してください。

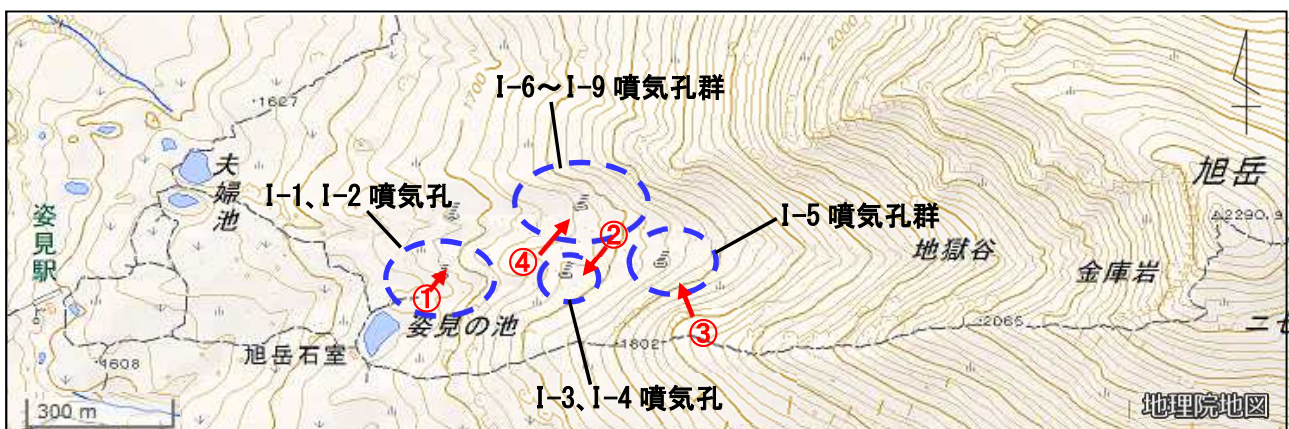


図3 大雪山 旭岳地獄谷爆裂火口内の噴気孔の位置（破線囲み）および写真の撮影方向（矢印）

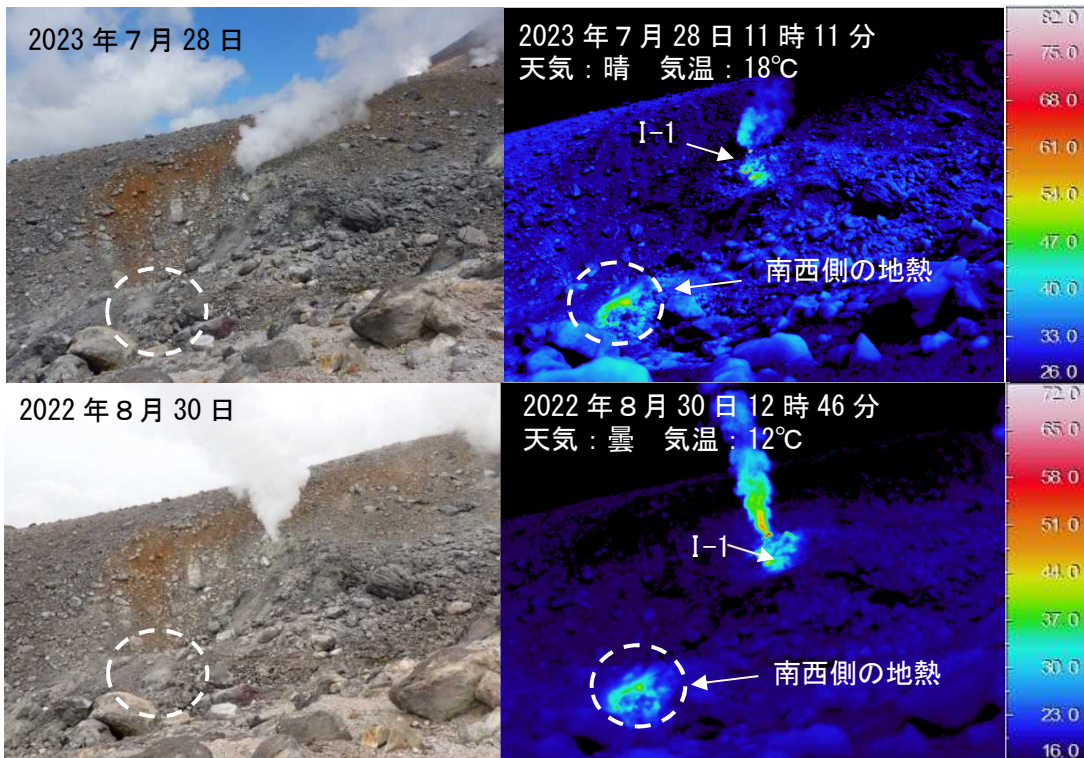


図4 大雪山 赤外熱映像装置によるI-1噴気孔の地表面温度分布 南西側(図3の①)から撮影
 ・前回の観測(2022年8月)と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。なお、前回の観測からみられたI-1噴気孔の南西側の地熱域(白破線内、1m程度の拡がり)は今回も確認されました。

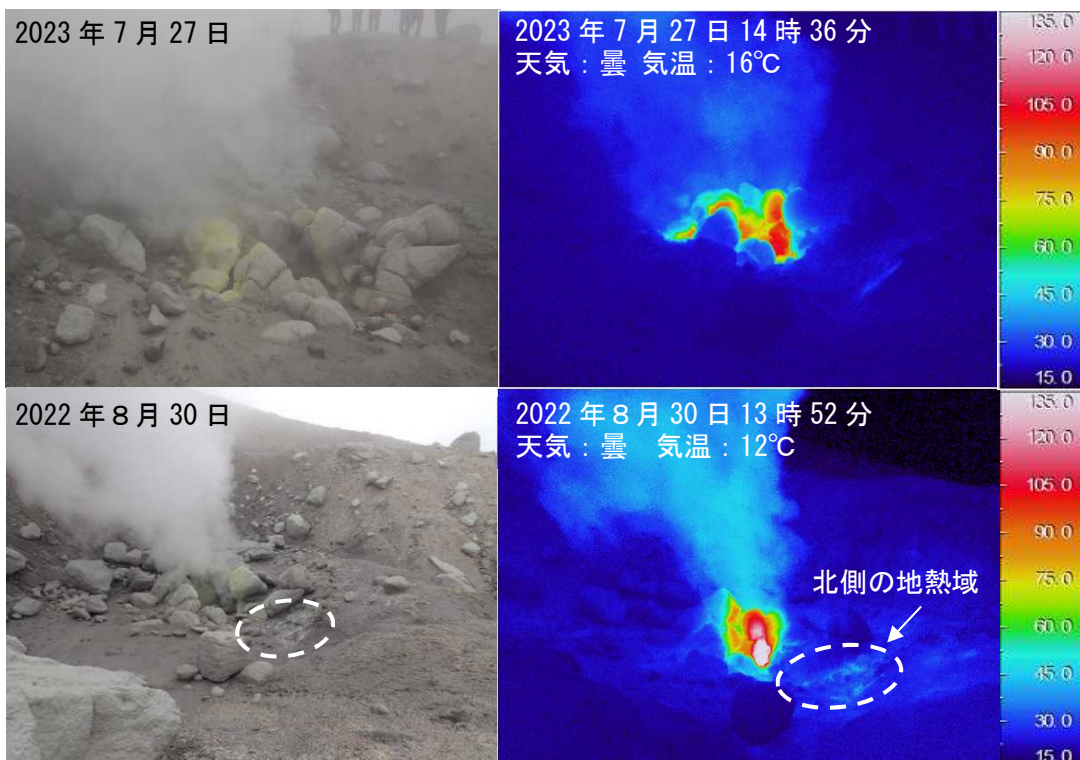


図5 大雪山 赤外熱映像装置によるI-4噴気孔の地表面温度分布 北東側(図3の②)から撮影
 ・前回の観測(2022年8月)と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。前回地熱域が認められたI-4噴気孔の北側(白破線内、2m程度の拡がり)には、今回明瞭な地熱域は確認されませんでした。

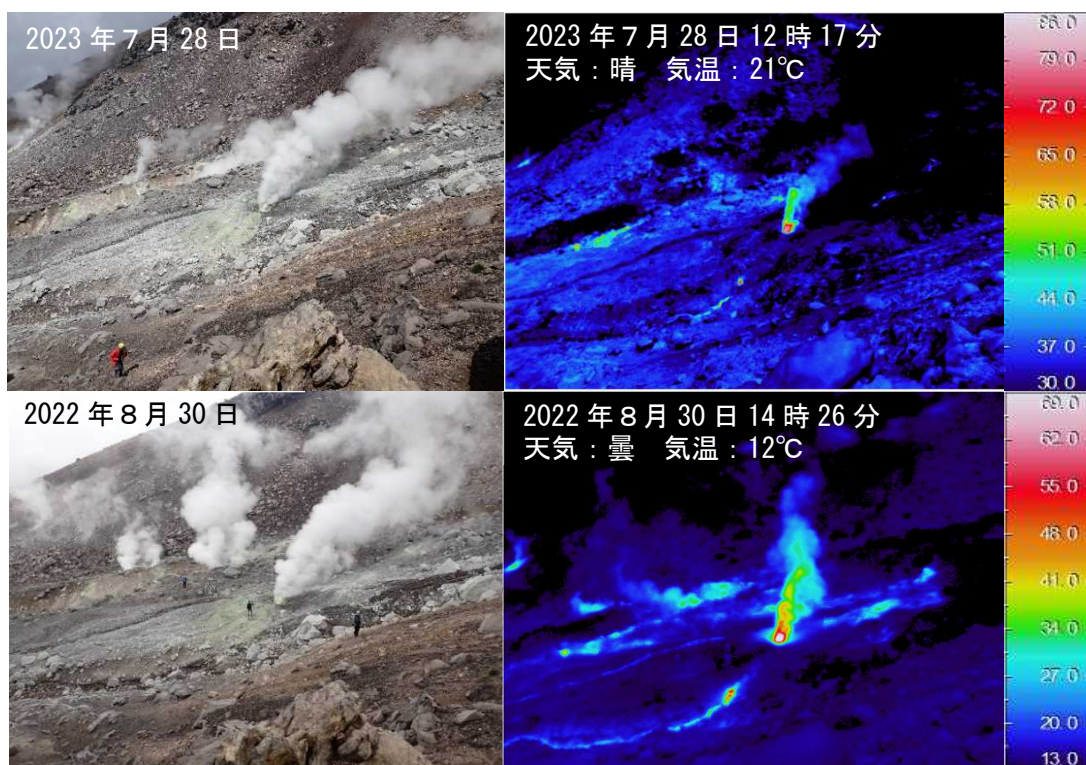


図6 大雪山 赤外熱映像装置による1-5噴気孔の地表面温度分布 南東側(図3の③)から撮影
 ・前回の観測(2022年8月)と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。噴気や日射の影響で地表面温度分布の見え方に違いがありますが、前回の観測と比べて特段の変化は認められませんでした。

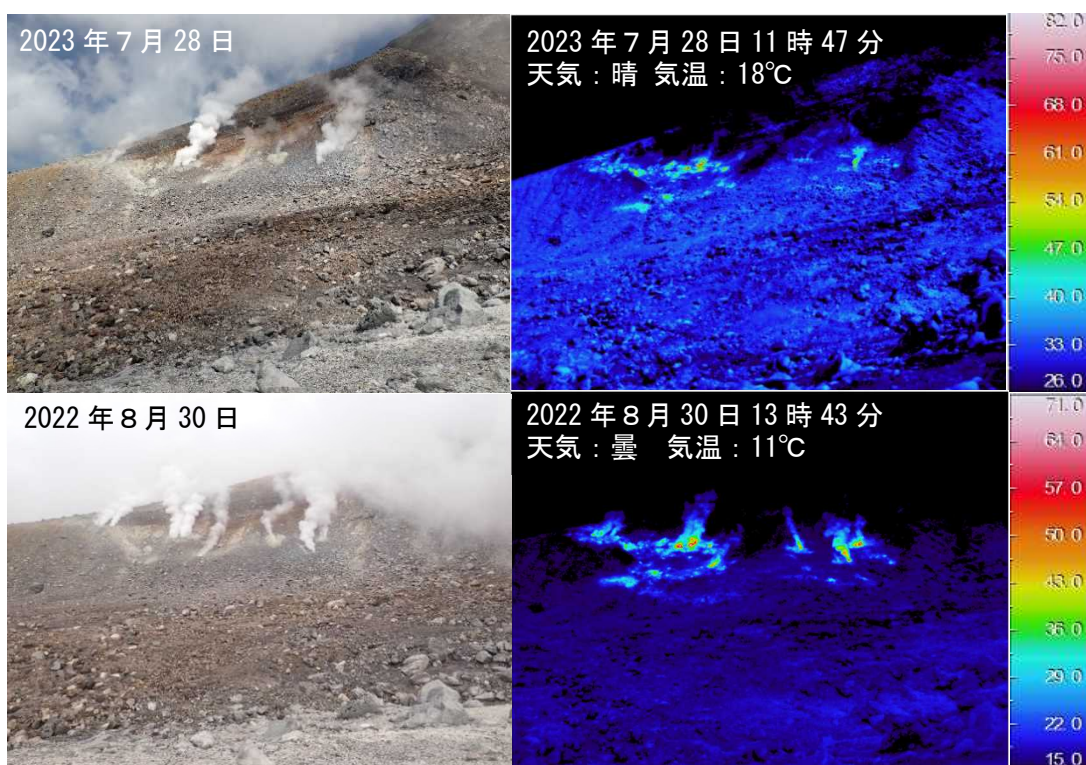


図7 大雪山 赤外熱映像装置による1-6~9噴気孔群の地表面温度分布 南西側(図3の④)から撮影
 ・前回の観測(2022年8月)と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。噴気や日射の影響で地表面温度分布の見え方に違いがありますが、前回の観測と比べて特段の変化は認められませんでした。

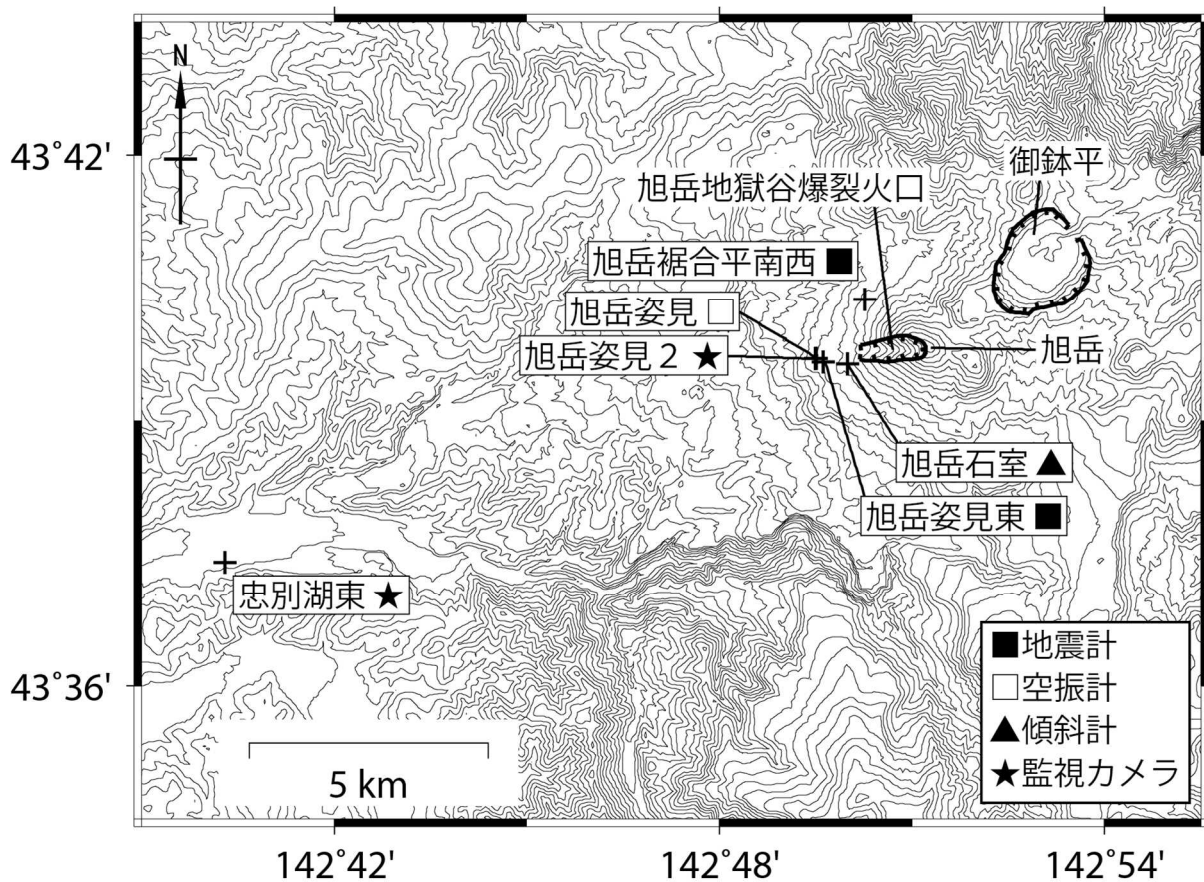


図8 大雪山 観測点配置図
+印は観測点の位置を示します。